

ひなみしのみこと あらきのみや
日並皇子尊の殯宮の時に、
かきのもとのあそみひと
柿本朝臣人

まろ
麻呂の作る歌一首 并せて短歌

一六七番

あめつち 天地の 初めの時の とき ひさかたの 天の河原に 八百萬
ちよろうかみ 千万神の 神集ひ 集ひいまして 神はかり はかりし
とき 時に 天照らす 日女の命 天をば 知らしめすと
あしはら 葦原の 瑞穂の国を 天地の 寄り合ひの極み 知らし
めす 神の命と 天雲の 八重かき分けて 神下し い
ませまつりし 高照らす 日の皇子は 飛ぶ鳥の 清御
みや 原の宮に 神ながら 太敷きまして 天皇の 敷きます
くに 国と 天の原 石門を開き 神上り 上りいましぬ 我
おほきみ が大君 皇子の尊の 天の下 知らしめしせば 春花の
たふと 貴からむと 望月の たたはしけむと 天の下 四方の
ひと 人の 大舟の 思ひ頼みて 天つ水 仰ぎて待つに い
かさまに 思ほしめせか つれもなき 真弓の岡に
みやばしら 宮柱 太敷きいまし みあらかを 高知りまして 朝言
みことと に 御言問はさず 日月の まねくなりぬれ そこ故に
みこ 皇子の宮人 行くへ知らずも